

市民の声を聞くことから始まる

私らしい議員の働き方

世界経済フォーラムが毎年発表する「ジェンダーギャップレポート」では、各国における男女格差を示すジェンダーギャップ指数を知ることができる。2021年の日本の順位は156か国中120位（前は153か国中121位）。先進国の中では最下位である。「経済」「政治」「教育」「健康」の4つの分野で成り立っているが、日本は経済、政治分野での指数が低い状態が続いている。「政治分野」を見ると147位と低く、女性の政治参加が少ないのが一目瞭然だ。

政治分野での女性の活躍は難しいのだろうか。女性が政治に積極的に関わっていくにはどうしたらいいのだろうか。

私たちの生活に一番身近なのが市町の政治。そこに関わる女性議員である鈴木恵さんに、議員としての仕事や働き方などについて話を聞いた。そこから、女性が社会と関わることについて考えてみたい。

議員になったきっかけ

1986年に「男女雇用機会均等法」が施行された。恵さんは均等法第一世代と呼ばれる世代にあたり、自動車販売会社での女性営業職第1号として採用された経歴がある。男性と同様にバリバリと自動車を販売してきた経験は、それからの生き方も大きく影響を与えている。

「結婚して長男を出産。子育て中、『女性・子育て・まちづくり』などがテーマの市民活動に参加していました。その中で、子育て支援について、母親対象にアンケートを取りました。300集まれば十分と言われていたところ、1200もの回答が集まりました。私たちの声を聞いてほしいという表れだと感じました。アンケートには『何に困っているか』『お金を何に使っているか』という設問がありました。『お金は学資保険や貯金に回し、今後のために備えている』との回答が多く、おむつ代やミルク代とかではなく、子どもの将来に掛るお金を見据えて

備えていることがわかりました。さらに、その他のお金の使い道として、『広い家に住み替えた』『車をファミリーカーに買い替えた』と、子どもを育てる環境作りに使っているのがわかりました。アンケートの結果を分析して、多くの方に子育て世代の思いを広く知って欲しいと、ニュースレターを作成・配布し、市や県へ子育て支援の提案をしました。当時から子育て中でも働きたい母親が8割ほどいましたが、旧浜松市は3世代同居が多いので、保育園はこれ以上必要がないと言われていました。しかし、実際には全国平均よりも6歳以下の子どもの保育入所率が低かったのです。保育園を増やすことも必要だと感じ、政策提案してきました。しかし、実現されることはありませんでした」

議員に立候補する前に、女性議員を出すバックアップスクールに参加していた恵さん。立候補を要請され、子育て世代の声を届けたいと立候補を決めた。自身が立候補するために、地域の女性支援者6〜7人でチームを作り、コンセプトやキャラクターなど企

画を立て、準備するのに1か月の期間がかかった。地域からの応援がない分、母親としての立場をフル活用。予防接種会場でパンフレットを配るなど、子育て真っ最中だからこそ思い浮かぶ作戦で、選挙に臨んだ。



鈴木 恵さん
浜松市議会議員 浜松市政向上委員会
自動車販売会社にて女性営業職第1号として採用される
長男出産後、市民活動に参加
1999年～2011年、2015年から
浜松市議会議員
2011年～子ども・若者支援のNPOスタッフ

議員としての仕事

「議員になったばかりの頃は悔しい思いをいっぱいしました。職員から自分にだけ資料を配られない、男性議員にだけ先に話を通すなど、意地悪をされることもありました。当時、30代女性、子どもがいる、会派に入っていない、地域の地盤がなくてどこから出てきたのかわからないなど、私は議会の中では異分子的存在でした。だから勉強をたくさんしています。市民からの声を理論やエビデンスで訴えていく、正統派でいいしかないと思っていましたから」

自分で日程をコントロールしてスケジュール管理ができるので、女性の働き方として議員はとても働きやすい、と恵さんは言う。視察や夜の会合があるので、家族がいる場合そこをクリアしなければいけないが、子どもの参観会や学校行事も議会と被らない限り参加できてきた。そして、子育ての経験は、議員活動にプラスだった。

「子どもが中学生の時、クラスで学級崩壊の問題が起きました。母親としてだけではなく、第三者（議員）として学校の様子を客観的に考えました。担任の先生に『何が必要か』聞いたところ、『人手が足りない』との答えを得ることができました。実は、

年度前から荒れている場合は年度初めに人員が割り当てられますが、途中から問題が発生すると、その時点からの人員補充は不可能でした。その出来事があったからこそ、問題が起こった時点から学校へ人員補充ができるような制度を提案し、実現しました」

「以前、議会に女性が3〜4人だった頃、自分の発言が全ての女性の代表と受け取られてやりにくい時がありました。現在は子育て中の若い議員も増えて、世代によって考えや見えてくる課題の違いがあり、『私人で全ての女性の代表』と構えて質問をしなくてもよくなりました」

の女性議員で作る「女性議員を増やす会」なないろの風」という団体がある。緩やかに連帯しながら、意見交換や政策勉強会などを行い、議員力を高めるのが目的。各地域で候補者と候補者を応援してくれる人を見つければ、そこから始まり、女性議員を増やす県内キャラバンを展開しながら、選挙に出馬する人を育てる活動もしている。

「出産、子育ての経験は、議員の仕事に役立ちます。妊娠中、出産後、サービスマ制度の不備を経験してみても、当事者目線の課題が見えてきます。生活そのものが政治課題です。一人親や生活困窮など声になっていない当事者の声も聞きます。LGBT施策もその一つです。社会、地域がより良くなる、個人が生きやすくなる。声を聞きながら多くの人の幸せを確保するために私は働きます。そもそも、課題探しが好きな私にとって議員の仕事は合っています」

「多くの人が聞いた話が、課題発見につながっています。議員は課題を見つけて、その解決に向けてコーディネートするのが仕事です。議会で質問することだけが仕事ではありません。現在一人会派での政党、会派にも属していません。おかしいこととおかしいと言えるところにいたいという思いがあるからです。また、私は『いないことになっている人たち』『ないことになっていること』をなくしたいと思いが強くあります。私の活動の原点である『子育て支援』は、以前は『子育ては母親が喜んでやるもの』であって、支援するものではないというのが現実でした。今でもLGBTQが社会の中にいないような仕組みとなっています。議員という発信力を活かして、『ここにいてここに課題がある！』と伝えていきたいと考えています」

女性議員であること

現在、浜松市の女性議員は12人。その中には子育て中、現在妊娠中の議員もいる。

女性議員が増えてきたことで、議員でも産休を取得できるよう制度の見直しが行われた。

「以前、議会に女性が3〜4人だった頃、自分の発言が全ての女性の代表と受け取られてやりにくい時がありました。現在は子育て中の若い議員も増えて、世代によって考えや見えてくる課題の違いがあり、『私人で全ての女性の代表』と構えて質問をしなくてもよくなりました」

議員は他の職業とは働き方が違うのだから、と産休を取ることに否定的な意見も聞く。そのような声のある議会では女性が立候補することはそもそも難しい。浜松市は党派を超えて女性議員が連帯している。これまで、引退する男性議員の地盤を引き継いで女性が出馬、県議へくから替える男性に替わり女性が出馬、といった形で女性の立候補が続き、女性議員が増える結果となった。男性から女性への引き継ぎが上手くいき、地域住民からも支持を得ることができたことが当選につながったと言える。

全国的政令指定都市の中で、浜松市は女性議員の割合が26.1%で3位であるのに対し、静岡市は6.3%に過ぎず、20位と最下位である。そもそも立候補した女性が3人で、全員が再選された女性議員であった。女性の新人の立候補者はいなかったのである。

静岡県には、市民派



長靴をはいて市民と一緒に活動中



議会質問中

女性同士のエンパワーメントが、女性も子どもも、誰もが暮らしやすい市町を作るのには必要不可欠であると感じた。様々な世代の女性に関わりたいと思える政治の場があり、女性の立候補者が増えれば、女性議員は確実に増える。しかし、社会に根深くあるジェンダーバイアスの壁が、女性の活躍する機会を狭めているのは事実だ。そして、女性自らもジェンダーバイアスにとらわれ、チャンスがあっても活躍の機会を逃しているかもしれない。

だからこそ、私たちの生活に近い市町の政治から、女性の活躍が期待できる場になってほしい。女性も積極的に地域の政治に関わることが当たり前になれば、男女格差のない誰もが暮らしやすい地域社会が実現するだろう。そのためには、男女ともにこれまでの生活、働き方の当たり前を見直す必要がある。性別役割分業を当たり前のこととして受け入れていないか、無意識のうちにジェンダーバイアスのある考えをベースに行動していないか。意識が変われば人々の行動も変わるはずだ。

ジェンダーバイアスと戦いながら、それを行動するパワーにつなげている鈴木恵さんの働き方から、女性が積極的に社会と関わることの必要性を痛感した。

(國井良子)

「ねっとわあく」アーカイブ

今号は特集「結婚って何？」アンケートを今の視点で切り込んだ、編集員と大学生たちのコメントを紹介しします。30年で、結婚に対する価値観がずいぶん変わったと思いませんか？

編集員 (緑枠)

大学生 (ピンク枠)

A④ 見合い結婚 現在はマッチングサイト？仲人ではなくて業者頼みになったのかー。

A④ 適齢期…昔は23歳。いつから言わなくなったんだろう。年齢から逆算すると1960年代の頃は結婚するのが当たり前、の時代だったんだ。

A④ 今の時代「結婚適齢期」なるワードは世の中で通用しない気がする。キャリアや人生の進め方も多様化しているから。結婚させたがりやの人が今もいるのかは、まだ学生の身なのでわからない。いるのかは気になる。

A② 「女性は結婚～生み育てる」という概念こんな概念を持っている人、今は減ってきているのでは？

A③ グループ交際って、どんな雰囲気だったんだろう。人生観が通じ合うというのは、今も変わらずパートナーに求められることだと思う。

A⑧ 「ごく自然の姿」とは？結婚するのが自然だったってことか。戦中、戦後はそんな時代だったとすると、結婚しない選択した人は、世間的にかなり厳しい状況に置かれることになったのかもしれないと想像してしまう。

B① 心に刺さります。

B⑤ 結婚すると男性をたてなきやダメなの…？

B⑤ この意見はバリバリのキャリアウーマンに多いイメージです。コンサルとか外銀とか。

C① 偏見に耐えなさいけなかったのか！

C③ 男女の結婚のみが想定されている時代。今は同性でもいいよね。



特集

What's marriage?
県内の各年代の人たちにアンケートをしました。

●女性 ●男性

A なぜ、結婚したのですか？

① 友達としてつき合っていたのに、周囲からおだてられてその気になった。タイミング。(会社員 29歳)

② 女性は結婚して家庭をもち、子どもを生み育てるものという概念がいつの頃からかあり、また、特に差気持ちはなかった。(会社員 36歳)

③ 学生時代よりグループ交際してきた仲間、自分の人生観と通じたのが結婚したきっかけです。(主婦 36歳)

④ この人とならいいかな、ということ。結婚。当時は、適齢期/なんて言葉が盛んに使われ、周囲に世話好きな人、結婚させたがりやの人が多かった。(主婦 55歳)

⑤ 親からの独立と家庭を持つことで、自分自身の人生を作りたいと思ったから。きっかけは、見合い結婚です。(主婦 41歳)

⑥ 収入が良くなり、二人で何とか生活できると思い、子供が欲しかった。落ち着いた。(ドライバー 26歳)

⑦ 今の奥さんが好きでした。(会社員 44歳)

B なぜ、結婚しないのですか？

① 結婚したいと思う男性がいらない。(研究員 25歳)

② 金なし。相手なし。(研究員 27歳)

③ この人となら一生一緒に生きていける、という人にめぐり会わなかった。やりたいことが多くて、自由気ままな生活を捨ててまで結婚生活をしたとは思わなかった。(現在、安心感のある人とめぐり会えた。一近日常婚予定) (幼稚園教諭 28歳)

④ 自分とピッタリと合う相手とめぐり会わないため。(塾教師 32歳)

⑤ 私たちの時代は、ごく自然の姿でしたから。(ピアノ教師 74歳)

C 結婚はしなくてはならないものと思いませんか？ まだ人生の中での位置づけは？

① 個人の自由である。しかし、まだまだ世間では結婚しないと何歳になっても一人前でないかのようにならざるを得ないので、その偏見に耐えるは大変だと思ふ。(会社員 25歳、未婚)

② やっぱり、しなくてはならないものと考えております。私は、人生の流れの中の一つの行事とか節目にしようかと思っております。結婚したからといって、その日から変わるはずはありません。(技術者 26歳、未婚)

③ 本人の自由にはすればよいので、どちらとも言いえないですね。私は、結婚したいときに年齢に関係なくすればよいと思う。血のつながりがない人と一緒に暮らす。初めてのことですよね。独身でいたときよりも、自分を知ることのできる状態のスタートだと思います。(会社員 29歳、未婚)

ひとこと

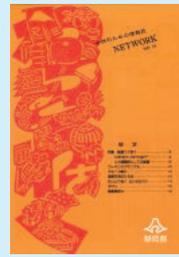
30年前の固定概念と社会的プレッシャー、えげつないですね。これは生きづらい…。さて、現代の弁護士による注目ポイントは、質問もコメントも「結婚」＝「男女で行う法律婚」と前提にしていること。近年、この前提への問題提起が進みました。「同性どうしだから」「男女カップルだけど、姓を変えたくないから」「男女カップルだけど、一方がトランスジェンダーで戸籍上の扱いが出生時に割り当てられたときのまま(＝戸籍上の表記は同性どうし)」等々。そういう理由で法律婚という選択肢のない方々が全国で続々と裁判所に訴えています。法律婚をするのもしないのも、誰もが同じスタートラインで選択できる、自由で平等な社会へと進化の時です。

●全体的に言い切りのコメントが多く、「こうであるべきだ」という各々の強い意思を感じます。30年経った今、同じアンケートを取ったらもう少し柔軟な表現がなされるように思います。

水谷陽子さん 弁護士 同性婚を求める「結婚の自由をすべての人に」東京・愛知訴訟担当

1991年はこんな年

ドラマ「東京ラブストーリー」「101回目のプロポーズ」放映。尾崎豊「I LOVE YOU」小田和正「ラブ・ストーリーは突然に」KAN「愛は勝つ」ヒット。1月日本人初の国連難民高等弁務官に緒方貞子氏就任。湾岸戦争勃発。4月新宿に新東京都庁開庁。5月育児休業法成立。千代の富士引退。ジュリアナ東京オープン。6月雲仙普賢岳で大火砕流発生。9月SMAPデビュー。



1991(平成3)年
発行 第19号
特集 結婚って何?
What's marriage?

C ⑧⑩ 子孫を生み出す、子孫を絶やさない、社会に貢献する…優生思想

C ⑧⑩ 「結婚=子どもを持つ」という考えがあるからだと思う。今は結婚も子どもを持つことも切り離して考える時代。

C ⑧~⑩ やはり年長の方々(もう今は老人?)は「結婚すべき」という昔風の価値観をお持ちだと感じた。個人的には「結婚すべき」は強すぎる表現に感じる…(私自身も結婚願望はあるが人それぞれでいいだろ、と)

C ⑧⑩ 男女が子孫を生み出すとか、子孫を絶やさないためとか、そういった表現がとても興味深く感じました。このような意見から、「結婚」というより(結婚して)子どもを産むほうが重視されているようにみえます。結婚と妊娠、子育てが当たり前のように一つのセットとして考えられているからなのでしょうか。

D ② 他人を養うという自覚がつく→男性の意見?妻や夫はどこまでいっても他人なのか。

D ② 必ずしも精神的安定が得られるとは限らないと思う。結婚したことにより、逆に鬱になる人もいます。

D ③ 今は未婚でも性格異常者に見られない

D ③ 性格異常者はさすがに言い過ぎ…

D ④ 精神的安定が得られるわけじゃない

E ④ この意見から男女の意識の違いが見える。仕事や趣味に積極的に参加することによって、女性は自分の人生に意識を傾けるようになったが、男性はどんどん変化していく目の前にいる女性ではなく、過去に大多数であった「自分に従ってくれる」女性を好んで求めているように思う。気持ちのずれ違いが生じるのも仕方がないと思う。

E ③ 結婚のために辞めることがバカらしい、と思いつつ、まだまだ結婚退社が多かった時代なんだろうと思う。結婚しても仕事が続けられるような制度(時短勤務とか産休育休とか)がある今だけ、ここに至るまでの過渡期を経験した女性たちは苦労したのだろうなあ。

E ③ 女性は変わってきているのに、男性の意識は変化しづらい?



※ねっとわあくのバックナンバーは、あざれあ図書室及びポータルサイト「あざれあナビ」で閲覧できます。
<https://www.azarea-navi.jp/netwaaku/>

C ⑦ 30年経ってみて、「重要なことの一つではなくなる」とまでは言えない気がした。仕事を続ける女性が増えた点に関しては間違いのないと思います。

C ⑥ 結婚って“尽くす”という一方的な感じ?そんなに不自由になっちゃうの?

C ⑥ 束縛もされ不自由さがあつたら決して幸せではない。

結婚って何?

- ④ ●人、という字のように、助け合いを一番うまく表現したのが結婚であり、長い人生の中で最も大切なものであると思う。
- ⑤ ●その人の価値観の違いなので、絶対にしなくてはならないとは言い切れないと思う。どんな結婚をしたかによって、その人の後の生き方の方向も変わってくるのではないかと思う。(主婦 33歳)
- ⑥ ●独身時代、親の保護下にいた者が、結婚して家庭を持つことにより、束縛もされ不自由さはあつても、それもまた幸せであらうと思う。自分以外の者を愛し、尽くす。人生の中においても大切だと思います。(主婦 36歳)
- ⑦ ●男女雇用機会均等法が施行されたから、女性が仕事を続けることが数十年前よりはずっと可能になりました。女性にとって今後は結婚が、重要なことのひとつではなくなると思います。(会社員 43歳 既婚)
- ⑧ ●してみるべきだと思います。原初の頃より、男女が子孫を生み出す基本生活を忘れてはいけないと思う。(主婦 44歳)
- ⑨ ●人生の中で、自分の意志で決定できるもののうち最大の位置づけであると思う。家族を構成し、子育てをすることにより、社会にも貢献する。(主婦 55歳)
- ⑩ ●子孫を絶やさないために、あらゆる生き物に与えられた特権を放棄することは無いと思います。(ピアノ教師 74歳 既婚)

D 結婚のメリット・デメリット

		こがよい	こがわる
結婚	・他人を養うという自覚がつく ・好きな相手と一緒にいられる ・子供を生むことにより近所や社会とのつながりがそれまでにない経験となる ・精神的安定を得られる	① ・自分の生き方を考える上で重要 ・お金も時間も全部自分のものにできる ・自分の意志通りの人生が過ごせる ・自分のペースでのんびり生活できる	② ・心配こがが増える ・忍耐が必要 ・なにがと飛躍がある ・自分の時間が減る
	未婚	③ ・将来どうなるのだろうという不安がややある ・性格異常者に見られる ・寂しい	④



— アンケートから —

- ① ●おわりに感嘆されることなく自由な生き方だから、それはそれでよいと思う。(会社員 28歳 未婚)
- ② ●いいと思う。結婚がすべてではない。(会社員 24歳 未婚)
- ③ ●自立できる女性が増えてきたため男性に世のように期待しなくなった。仕事がおもしろいのに、結婚のために辞めることがバカらしく思う女性が多いのでは。逆に、男性がだらしなくなってきた。(会社員 26歳 未婚)
- ④ ●女性は仕事も趣味もますます頑張る。自分主眼でいる人が増えてきているのに対し、男性は相変わらず自分に従ってくれるような女性を結婚相手として求めている現状なので、無理に結婚しなくてもよいという女性が増えているのは当然であると思う。しかし、そういう女性たちが本当は結婚したいのだと思う。(研究員 25歳 未婚)
- ⑤ ●周囲に振り回されて自分の考えで行動しにくかった結婚前に比べ、今の方が自分に余裕が持てると思う。(主婦 37歳)

E ③ こういうのを見ると時代の変化を感じる。今では、男性が育児休暇をとったりもするし、必ずしも女性は仕事を辞めなければいけないというわけでもない。

E ① 周囲を気にしない人は全然つくらなさそうですね。

【全体について】

●当時の若い人は今の50~60代で、昔ながらの価値観を好む印象があつたけど、91年当時は柔軟な価値観を持っていると感じた。それこそ今の若者と変わらない気がする。

あざれあ図書室にある おすすめの本を紹介します!



『耕す女』

(NPO法人田舎のヒロインズ インプレス 2019年)

多彩なキャリアを経て農業に取り組む女性たちのエッセイ集。どんなきっかけで農業を始めたのか、いま何を考えて取り組んでいるのかを語ります。持続可能な世界を作るために挑戦を続ける力強いメッセージが伝わってきます。



『地方を変える女性たち』

(籾幸子 日経BP社 2018年)

地方創生の立役者は男性ばかりではありません。100年先を見つめる未来志向、グローバルな行動力、柔らかなリーダーシップで学ぶことに熱心という共通項をもつ、地方で活躍する17人の女性たちへのインタビュー集です。



『最新版 市民派議員になるための本』

(寺町みどり・寺町知正 WAVE出版 2014年)

「市民派議員」とは、政党に所属せず、自分ひとりの責任で判断し発信する、議会内で議席をもった個人のこと。自らの手で市民の政治を作りだそうとする人のために、市民型選挙や議会活動のノウハウを公開した実践的な本です。

利用案内

貸出：図書・雑誌10冊、ビデオ・DVD4本(3週間)

※貸出カードが必要です。現住所、生年月日を確認できる本人確認書類をお持ちのうえ、カウンターにてお申込みください。

開室時間：平日9:00～18:00、土日祝9:00～17:00

休室日：第1・3・5日曜日、図書整理日、年末年始

TEL:054-255-8763 FAX:054-255-8759

編集員募集

募集人数／若干名

仕事内容／男女共同参画の今を知る情報誌「ねっとわあく」(年1～2回発行)の企画・取材・原稿案の作成・編集から発行まで

作業会場／静岡県男女共同参画センターあざれあ

※平日昼に編集会議を10回程度行います。

※提出書類・募集締切等詳細は、WEBサイト「あざれあナビ」をご確認ください。

問合せ先／あざれあ交流会議グループ

TEL：054-250-8147 (平日9時～18時)

Email：info@azarea-navi.jp

編集後記



左から 望月富美代 小柳朝美 國井良子 其田育子 森朱里

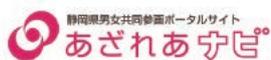
●「はたらくおじさん、はたらくおじさん、こんにちは♪」と、口ずさんでいたら夫から、「それ何？」と。子どもの頃、小学校の社会科で、「はたらくおじさん」というテレビ番組を見る時間があつた(40年以上も前!)。今考えればひどいジェンダー差別だ。今は男性(おじさん)だけでなく、女性も、若い人も高齢の人も働く。当時の当たり前な性別役割分業は、今の当たり前ではない。時代で変化する「当たり前」を、自分の中で常にアップデートしていかないとね!
(編集長 國井良子)

●比較的、精神・身体的な負荷が高いと言われる仕事をしながら編集員ができるか、初めは不安がいっぱいでした。でも、挑戦して良かった!! ここでしか味わえない達成感と貴重な出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。
(小柳朝美)

●「人から話を聞く」普段行っていることだが、「取材として話を聴く」となると、自分のアンテナを総動員! 改めて記者・編集者の仕事の奥深さを感じるとともに、「目から鱗!」となる話も聞かせていただき、貴重な経験をさせてもらったことに感謝。
(其田育子)

●仕事とは何か?と問い直す機会となりました。私は十代で熱傷したため、治療を優先して生活のために仕事をし、周囲に迷惑をかけないようにと暮らしてきました。今回の出会いから、自分の人生を悔いなく生きたいと思いました。この記事が何かのきっかけとなれば嬉しいです。
(望月富美代)

●編集員の皆様にたくさんのアドバイスをいただき、前号とはまた違った視点から男女共同参画について考えるきっかけになりました。多くの方に読んでもらえれば幸いです。
(森朱里)



あざれあナビSNS



ねっとわあく

2022/3/14 Vol.77

Shizuoka Prefecture

発行日/令和4年3月14日

企画・編集・発行/あざれあ交流会議グループ

〒422-8063 静岡市駿河区馬淵1丁目17-1

TEL/054-250-8147 FAX/054-251-5085

編集長/國井良子

編集員/小柳朝美 其田育子

望月富美代 森朱里

印刷/星光社印刷株式会社

「ねっとわあく」は年1～2回発行します。県内の男女共同参画センター、市町役場、図書館などの公共施設で配布しています。「ねっとわあく」のバックナンバーは、あざれあ図書室や静岡県男女共同参画ポータルサイト「あざれあナビ」で閲覧できます。

あざれあナビ <http://www.azarea-navi.jp/>

